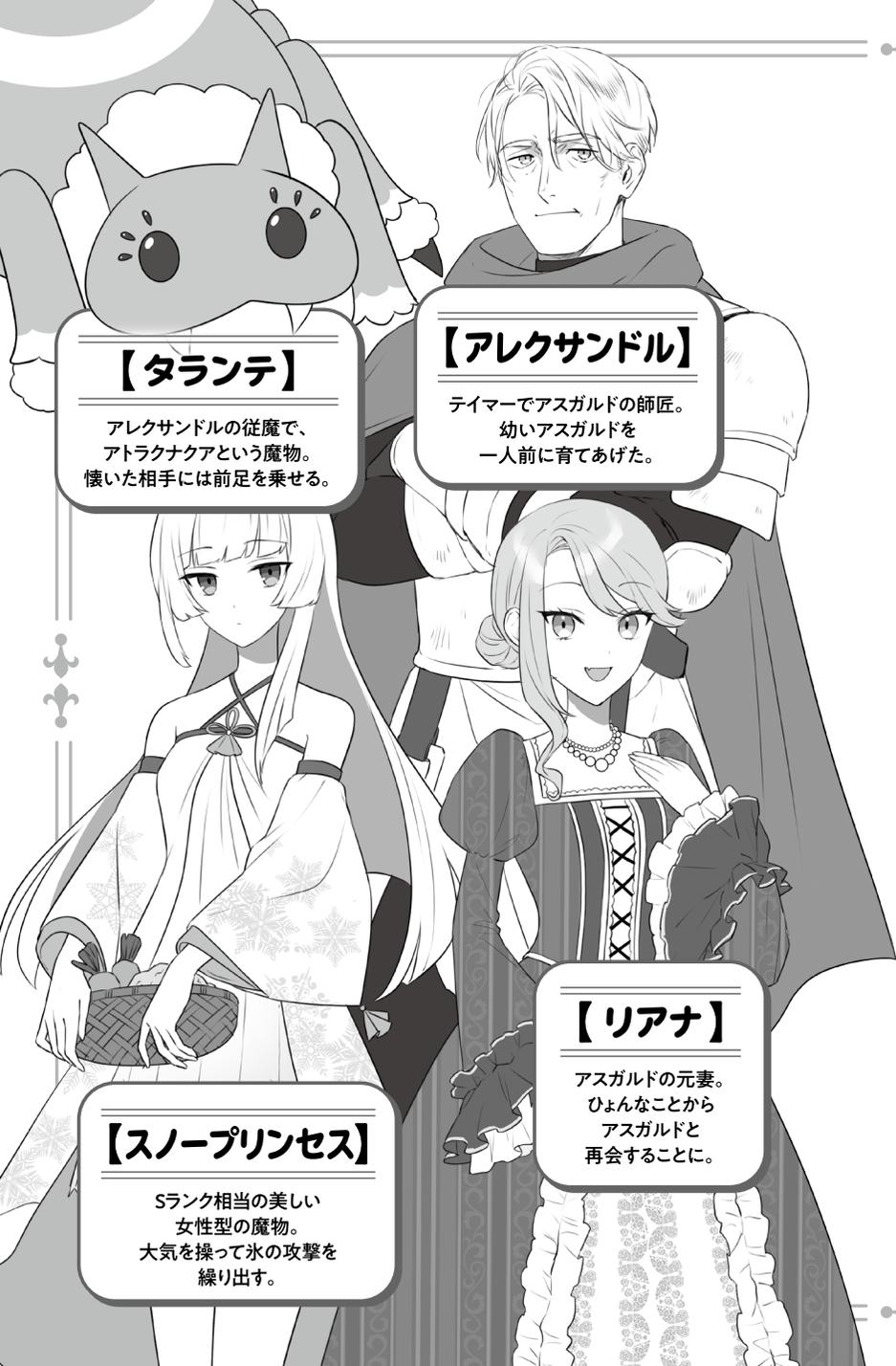


異世界で
【まものおしゃん】
開業しました

元Sランク冒険者、
故郷の村で
一人娘とのんびり
スローライフ

2

YINYANG
著 陰陽
絵 つなかわ



【タランテ】

アレクサンドルの従魔で、アトラクナクアという魔物。懐いた相手には前足を乗せる。

【アレクサンドル】

テイマーでアスガルドの師匠。幼いアスガルドを一人前に育てあげた。

【スノープリンセス】

Sランク相当の美しい女性型の魔物。大気を操って氷の攻撃を繰り出す。

【リアナ】

アスガルドの元妻。ひよんなことからアスガルドと再会することに。

【フィッチ】

アスガルドの従魔で、ロックバードという魔物。アスガルドによく懐いている。

【アスガルド】

Sランク冒険者でテイマー。クラン『^{けもの}獣の檻』を脱退したあと故郷に帰り、スローライフを満喫中。

【リスタ】

『獣の檻』のメンバー。アスガルドのことが好き。優しくしてしっかり者。

【リリア】

アスガルドの一人娘。人見知りで恥ずかしがり屋。素直な性格で、心を開くと話してくれる。

プロローグ

俺はアスガルド。

前世は日本人で、異世界に転生したのに、なんのチートもないスキルなしのテイマーをやっている。

そして、家族は娘ただ一人。

妻は家を空けがちな俺を見限ったのか、三年前に子供を置いて蒸発した。

スキルのあるテイマーと違い、タイムできない魔物もいるが、その分、師匠から譲り受けた豊富な知識をもとに、Sランク冒険者にまで昇り詰めた。

俺が所属していたのは、幼馴染と作ったクラン『けもの獣の檻おり』。

パーティーを組んだ最初のメンバーかつ幼馴染で、俺の親友のランウェイが、クランマスターを務めるクランだ。

獣の檻がSランクのクランになり、最高難度のダンジョンに潜る日の前日。

俺はランウェイから戦力外通告を受けてしまった。

俺がタイムするBランクの魔物——フィッチを手放し、より強い魔物をタイムするのを拒んだことが理由だ。

卵から育て、何度も俺の命を救ってくれたフィッチを、俺は家族のように愛していて、手放すことができなかったんだ。

そして俺は生まれ故郷のルーフェン村に戻り、長年ほったらかしにしていた幼い娘、リリアと共にのんびり暮らす道を選んだのだ。

村に戻ると、村は魔物の被害にあえいでいた。

討伐費用がないので村を捨てなくてはならないと嘆く村長。

……ん？ ——つて、いやいや、それ、討伐しなくてもなんとかなるぞ？

俺は次々に舞い込む魔物のトラブルを解決していくなかで、『まもののおいし屋さん』を始めることを思いついた。

討伐だけが冒険者の仕事じゃない。

俺は、人間と共生可能な魔物と人間との架け橋になることを仕事にしたいと思った。

魔物たちの危険な生態は、人々がそう望みさえすれば、討伐しなくても解決できることがあるんだ。

様々な魔物と人々との共生を実現させ、貧乏だった村は潤っていった。

ついにはSSランクの魔物、クラーケンを利用して、白いダイヤと呼ばれる栄養豊富な天日塩を生み出すことに成功し、新たな観光名所を誕生させた。

その噂を聞きつけた他の地域からもどんどん声がかかり、民衆は「魔物を守れ！ 討伐よりも共存を！」と言い出した。

他の冒険者が討伐に行っても、近隣住民たちに邪魔をされる始末。

魔物を狩れなくなった冒険者たちは次々と廃業を余儀なくされ、ついには俺に王宮から声がかかる。

俺は『まもののおいし屋さん』として、安易な儲け話に飛びついた人々の目を覚まさせ、冒険者たちは再び冒険者ギルドに戻ってきたのだった。

さて、次はどんな依頼が待っているのだろうか。

第一章 一万体の魔物

俺はフィッチを伴い、スリアントの街へとやってきていた。

ここはかなり大きな街で、別の国との貿易も盛んな都市に近い街である。

俺がここに来てきたのは、冒険者ギルドの受付嬢によって、『活用共生検討の余地があるもの』に振り分けられた依頼を、実際にそれが可能かどうか確かめるためだ。

スリアントの依頼主であるペギーさんはまだうら若き女性で、街の代表としてトラブルに対応する、役場の人間とのことだった。

この世界は女性の地位が低く、なかなかこうした仕事に就くのは難しい。そもそも識字率が低い
ため、選択肢がないのだ。

女性が仕事で稼ごうと思うと、冒険者くらいしか方法がないのが、今の俺の住む世界の現状である。

にもかかわらず、この若さでその仕事を任せられるということは、彼女はかなり優秀な人なのだろう。

ペギーさんは一瞬フィッチに怯えたあとで、俺を現場である憩いの広場へと案内してくれた。

「……ここは街の人たちの憩いの広場ですが、ある日突然、大量の魔物が発生するようになったの

です。おまけにこうして……」

ペギーさんはそう言って、斧か何かで幹を割られて中が丸見えになってしまった木を、遠くから指さした。

幹の中が見えているのはその一本だけで、まだ新しい傷口が遠目からでも分かる。

その穴は自然に開いたのではないことが見て取れた。

「あの穴の開いた木の中が空洞になっているのは分かりますか？ 木の専門家に調査してもらったのですが、ここに生えている木は、すべてこの状態ということでした」

ペギーさんの説明を聞いて周りを見ると、広場を取り囲むように、かなりの数の木が生えていた。「——どうやらこの木の中の空洞を、棲み処にしている魔物がいるようなのです。毒を持つ、かなり凶暴な魔物だということで、みんな恐れて広場に近付かなくなりました」

ペギーさんはこわごわといった様子で体を両手で抱きすくめながら話す。

すべての木が同様の状態であるということは、見えないだけで、たくさんの魔物がそこに存在しているのと同義だ。

見えないから怖くない訳ではない。

幽霊と同じようなもので、そこにいるかもしれない、いや、きっとそこにいるはずだという想像に、人はまず恐怖を感じるのだろう。

「あの木の幹の調査をする際にも、斧で幹を壊した人間が、魔物の毒にやられて医者にかかっているのです。しかもですよ？ 魔物は一種類じゃないんです」

「二種類ではない？」

俺はペギーさんに聞き返した。

「別の種類の魔物までもが、木の幹の中に棲んでいるようなのです。正直、一刻も早くどうにかしてほしいのですが……」

それはあまりないことだな。動物にも魔物にも基本的には自分たちの縄張りというものがあり、同じ種族であっても別の群れを近付けることはしない。

「活用共生検討の余地ありということで、討伐ではなく、まずはアスガルドさんに見ていただくのがよいでしょう、と冒険者ギルドで受付嬢の方に言われてしまいました……」

「なるほど、お話はよく分かりました」

「安く済むのであればと、上層部がアスガルドさんを雇うことを決めてしまったのです。本当に、そんなことが可能なのでしょうか？」

ペギーさんは、むしろ早く討伐に切り替えたいようだった。見えないとはいえ、凶暴な魔物が幹の中にいる。しかもそれが二種類も、と言われてしまったのは、気が急ぐのも無理はなかった。

「ふむ、まずは見てみましょう」

俺は最初に、斧で割られた方の木の幹の内部を覗き込むと、確かにそこには二種類の魔物がうごめいていた。ただ、幹が割られて直接雨風が当たるようになったことで魔物の数は少なくなっているようだ。

続いて他の木の幹をノックしたり、幹に耳をつけたりして、内部の音を確認する。



ペギーさんは、今にも目の前で俺が襲われるのではないかという想像をしているのか、恐怖のあまり逃げ出したそうに、ガタガタ震えながらその様子を見ていた。

「確かに、中は空洞になっているようですね。すべての木が同じ状態でしたよ」

俺は木の幹をコンコンと拳で叩きながら言う。

「おまけに、二種類の魔物がいるかもしれないのではなく——確実に二種類の魔物が幹の中を棲み処にしているようです。穴の開けられた木と同じ魔物が中にいることが、動く音で分かりますね」

穴から魔物が出てきていないのに、ペギーさんは絶望的な顔になった。

「凶暴な魔物が二種類も……ですか？ 本当にそんなものと共生したり、活かして私たちの助けにしたりするなんてこと、できるのでしょうか……？」

ペギーさんの表情は、共生できると伝えられても断りたいのが、ありありと分かるものだった。

共生や活用ができるかと伝えても、『魔物は恐ろしいもの』『近付きたくないもの』と思っている人たちがまだまだ多い。

そこを言葉で説明しても、感覚で理解するのは難しい。

ましてや、あらかじめ凶暴と聞かされてしまっているのだから、ペギーさんの反応も無理からぬことだった。

「いや、凶暴なのは、そのうちの一種類だけだ。もう一種類はまったくおとなしいですよ」

そう聞かされても、ペギーさんが安心する様子はなかった。

「——それに、凶暴と言っても、外敵に対してのみです。攻撃しない限り襲ってはきません」

人間を捕食するタイプの魔物でもない限り、基本積極的に人間を襲うことはない。

「ペギーさん。最初にどなたかが、魔物を木の外で見かけて、この木を調査することになったのではないですか？」

「はい、その通りです」

「調査を開始することで、彼らの棲み処である木をわざわざ傷つけて、幹の内部をむき出しにしたことが、彼らに攻撃と見なされてしまったのですよ」

俺は木に触れながら、そう言った。

この木に棲む魔物が昨日今日ここに現れた訳ではないことは、幹の内部の様子から分かった。調査の際にわざわざ刺激してしまったことで、ここまで大騒ぎになってしまったのだろう。

「では、我々は放っておけばよかったということですか？」

「はい、そうなりますね。この木はいつからここに？」

「もう何十年も前からになります。この広場が作られてから、ずっとここにあるものです」

ペギーさんは木を見上げながら言う。

「その間、特に魔物が見つかるようなことはありませんでした。今まで我々は安全に暮らしていたのですが……」

「——この木の中にいる魔物は、二種類とも、この木と共生関係にある魔物です。この木がここに植えられたすぐあとには、もう中に棲んでいたことでしょう」

それを聞いて、ゾツとしたような表情を浮かべるペギーさん。

「木の幹の内側をご覧になりましたか？ 昨日今日でこんな風になった訳ではないことが、お分かりになるかと思えます」

「いえ、私はちよつと……近づけないです」

そう言つて、ペギーさんが一歩後ずさる。

「それがここまで気付かれずに、何十年と経過しているのです。気付かれるようなことがなければ、今まで通り、彼らはここで暮らしていたでしょうね」

何十年も何事もなかったことが示している通り、共生関係にある木を、魔物はむしろ守っていた。そうやって静かに暮らしていたのに、魔物だというだけで騒ぎ立てられたことが、ここに棲んでいた魔物たちが人間を襲つた原因だった。

だがペギーさんは、『知らない間に何十年も棲みつかれていた』という部分に、背筋が寒くなつたような表情を浮かべていた。

共生が可能であつても、街の人たちが受け入れなければ、結局は退治することになってしまう。

活用共生には、そこに暮らす人々の魔物に対する拒絶反応という壁が存在しているのだ。

「もし、魔物をどうしても討伐なさりたいのであれば、この木そのものを撤去する必要がある
ます」

「木を切り倒すということですか？」

俺の言葉を聞き、ペギーさんが聞き返す。

「魔物と共生関係にあるこの木は、中にいる魔物がすべて討伐されたところで、再び同じ種類の魔

物呼び寄せるでしょう。この木が自分自身の身を守るためにね」

「それは一体どういうことでしょうか？」

「この木の葉しか食べない魔物もいるのですよ。魔物呼び寄せたくないなら、そもそもこの木を人の住むところに植えるのは、あまり適切じゃない」

「それはできません。この木は親睦しんぼくの証として、姉妹都市であるサンスクリッダから贈られたものなのです」

俺の言葉に、ペギーさんは首を振つて困りだし、そして続ける。

「この木を撤去することを、我々は望んでいません」

「……では、魔物との共生を選ぶしか、選択肢はないと思います。この木に魔物を寄せつけなくする手段は、今のところありませんのでね」

「そんな……」

ペギーさんはあくまでも討伐したいようだった。

「——何度も討伐の依頼をなさるか、このまま放つておいて共生していくか。答えは二つに一つですよ、ペギーさん」

俺はペギーさんに選択を迫つた。

「討伐を望むのであれば、俺にはこれ以上できることはない。改めて、冒険者ギルドに討伐の依頼をなさってください」

討伐に切り替えるかどうか判断するのは依頼者だ。俺はもう、冒険者として討伐の仕事はしない。

討伐するのであれば俺に出番はない。

俺の言葉を聞いて黙りこくるペギーさんを見て、俺は続ける。

「すぐには答えが出ないと思います。どちらの方が街のためにとってよい選択なのか、よく考えてお決めになるといいでしょう。俺は、放っておくのが一番いいと思いますけどね」

この街のように、ある程度予算が潤沢な場所ともなると、お金を払えばすぐに解決できる討伐をしたいのだと思うが、それでもいざずれば、共生の道を選ぶことになるだろうと俺は思っていた。

実はこの中にいる比較的凶暴な方の魔物は、同種の魔物の種族の中で、最も強力な毒を持つことで知られており、討伐ランクがCランクに指定されている。

人の住むところに出る魔物の中ではかなり高いランクで、現れるたびに毎回討伐していたら、いくら予算が潤沢とはいえど、きりが無い。

なにせ一つの木の中には五十体以上の魔物が棲んでおり、しかも木は全部で二百本以上も植えられているのだから。

Cランクとはいえ、それが一万体。大規模な討伐隊が必要になるだろう。

冒険者ギルドの受付嬢が、この問題を『活用共生検討の余地あり』の書類の中で最重要に据えたのも頷ける。

ペギーさんをこれ以上怯えさせてはいけないので、直接口にはしなかったが、討伐を依頼するのであれば、一万体という途方もない魔物の数を、やがて知ることになるだろう。

だが、共生を選ぶのであれば、具体的な魔物の数まで知る必要はない。

そして、俺はペギーさんに別れを告げて、スリリアントの街をあとにした。

★ ★ ★

しかし、後日緊急で呼び出され、俺はフィッチと共に、再びスリリアントの街へとやってくるようになった。

冒険者ギルドによると、状況が一変したので再度確認してほしいとのこと。

ある程度予想していたことではあったが、『このタイミングでか』と思っていた。

「状況が変わったとのことだが、いったい何があったというんです？ ペギーさん」

俺は慌てた様子のペギーさんをなだめながら言った。

「三種類目の魔物が湧いたんです!! 一つの木に三種類もですよ？ どうしてこんなことに……」

ペギーさんは思わず地面に膝をついて、頭を抱えていた。

「やはりこの木が、いえ、この街そのものが呪われているとしか思えません……我々は一体どうしたらいいんですか？」

そう言うペギーさんに俺は質問する。

「では、討伐に切り替えるということでしょうか」

「討伐を依頼したら、木の中には魔物が一万体以上もいるとのこと、莫大な討伐費用を提示されてしまいました」

だろうな。Cランクが一万體だ。それ以上のランクがないことだけは救いだ、この状況では街全体がパニックになってもおかしくない。

「一万體を毎回討伐なんて、いくらこの街の予算が潤沢でも、到底できることはありません。その上、三種類目の魔物だなんて……!! この木は呪われているんでしょうか」

そう言うペギーさんは今にも泣きそうだった。

「友好と親睦の証である、この木を切り倒すしか、我々にはもう選択肢が残っていないのでしょうか？ 教えてください、アスガルドさん!!」

「ペギーさんは、その魔物を直接目撃されましたか？」

「……いえ、直接は……ただ、魔物を見た人の話によると、新しく現れた魔物が凶暴な方のCランクの魔物を襲っていたと言っています」

「新しい魔物が、元々いた魔物を襲っていた、ですか」

「Cランクを襲える魔物って、一体何ランクなのでしょう？ 少なくともCランク、下手をすれば、Bランク以上だってありえますよね？」

「まあ、ありえるでしょうね」

俺は慌てるペギーさんの質問にそう答える。

「街にBランクが出たなんて、私はいまだかつて聞いたことがありません」

「俺は聞いたことがあります、まあそういった例は少ないですね」

「それでもなお、『活用共生検討の余地あり』として、再びアスガルドさんをお願いしてみよう

に冒険者ギルドの受付嬢に言われてしまったのです」

「——ひよっとして、その三種類目の魔物は、空を飛びますか？」

俺はペギーさんに尋ねた。

「……はい、ご存知なのですか？ それとも、冒険者ギルドの方から、事前に何か聞いてらっしゃるのですか？」

「いや、特に聞いてはないが」

「……一つの街に、魔物が三種類も棲んでいるだなんて……本当にこれでも共生可能なんでしょうか？ とても私にはそうは思えません。やはり何とか上にかかけあって、討伐をしてもらうしか……」

ペギーさんがそう呟くのを聞いて、俺は彼女に言う。

「——って、いやいや、それ、討伐しなくとも、何とかなるぞ？」

「え？」

「というよりも、遅かれ早かれ、三種類目はこの街に現れただろうからな。それが今だったという、それだけの話なんだ」

俺の言葉に、ペギーさんはキョトンとしていた。

この木はスプラバギジュアという種類の樹木だ。この樹木は例に漏れず、幹の中の空洞を、その巣として、スコープアントとシエルズパスという昆虫タイプの魔物に提供する共生植物である。

スコープアントは姿かたちはアリのような魔物で、毒針のある尻をサソリのように上げて毒攻撃をするのだ。その毒性は毒を持つアリタイプの魔物の中でも最強を誇る。

また、このスコーピアントはクワガタのような鋭く長い牙を持ち、それであらゆるものを切断することもできる。街に現れる魔物の中ではかなり強く、凶暴な魔物なのだ。

一方、シエルズパスは大人しい昆虫タイプの魔物で、その姿は真っ白な貝殻のような見た目をしている。

また、その体の下側にタコの吸盤まがゆばんのようなものがついており、そこから木の栄養分を吸い取っているのだ。

そして、彼らが集まってる様は、大分不気味に見える。

スプラバギジュアはスコーピアントに棲息場所だけでなく、餌も与える。それは葉っぱから分泌される栄養と、そこに共に棲むシエルズパスが分泌する糖が多く含まれた甘露かんろうだ。

その餌の見返りとして、スコーピアントは、絡みついてくる蔓つるや植食者からスプラバギジュアを守る。

この二種類の魔物は、スプラバギジュアの幹の中以外では生存することができず、この樹木もまた、それによって恩恵を受けているので、これらの三者は互いにとつて必要不可欠な存在と言える。また、この関係性によって、いくら討伐しても、彼らはスプラバギジュアのところに再び集まってくる。

一方、スプラバギジュアをめぐる魔物の関係性には、スワロウフライという別の魔物も関与する。それは燕つばめのような見た目だが、実際には蝶に似た性質を持つ、れつきとした昆虫タイプの魔物だ。スワロウフライの幼虫は、甘露などの報酬をスコーピアントに与えることによって、スコーピ

アントからの攻撃を受けずに、スプラバギジュアの葉を摂食せつじくできる。

また、このスワロウフライもスプラバギジュア以外の植物の葉を食べることができない。

おまけにスワロウフライの成虫はスコーピアントとその幼虫を食べる。

そして、スワロウフライは、スコーピアントの数が減った際に、彼らの幼虫に似た自分たちの子供を孵化ふかさせ、甘露を与えつつ、スコーピアントにその幼虫を守らせる。

だからこの三者が同時に存在する場合、魔物の数は一定数に保たれる。なおかつ人間が刺激しなければ攻撃することもないため、共生が可能になるのだ。

この街の名前のスリリアントとは、『アリと生きる』という意味の、古代語と合成された言葉が由来である。

おそらくこの街が作られた際に、スプラバギジュアを贈られた当時の役人は、三者の魔物とその樹木が共生できることを理解した上で、この木を植えたのだろう。

だが魔物が街に棲むことを街の人々に伝えれば、間違いなく拒絶される。ただ、スコーピアントとシエルズパスは幹の内部にいるから、隠していれば絶対にその秘密が暴かれることはない。そして、その事実を知らなければ、人々は何も気にせずに生活することができる。

贈られたスプラバギジュアを必ず植えなければならぬ使命があったとはいえ、随分と乱暴な真似をしたものである。

「この穴の開いた幹を塞ぎましょう。それでもう問題は無いはずです。攻撃しなければ、襲ってくることはない魔物ですからね」

俺は木の幹を撫で、少し間を空けてから続ける。

「それと、スプラバギジュアの木の活かし方をお教えしますよ」

「木の活かし方……ですか？」

ペギーさんは不思議そうに首を傾げる。

「スプラバギジュアの実は、食べられることをご存知ですか？」

「いいえ？ だって、この木はいつも、実のようなものもがなっても常に緑色で、とても食べられそうには……」

ペギーさんは、木の枝になっっているたくさんの実を見ながら言う。

「ああ。それが普通なんです。でも、下にたくさん実が落ちていてでしょう？ 落ちていれば緑色でも成熟している証拠なんですよ」

スプラバギジュアは緑色のドングリのような実が生り、熟すとそれが落ちる。

山にも自生しているため、そこでは落ちた実はずぐに動物や魔物に食べられてしまうが、ここは街中でそんな動物も魔物も存在しない。

落ちてすぐに拾いに来なくとも、取り放題なのである。

実は緑色をしているが、熟して落ちた実の中の種をアク抜きしたものは、ナッツのような味と風味を楽しむことができるのだ。

また、専用の道具を使えば、実から油を搾り取ることも可能なため、非常に使い勝手のいい植物なのであるが、食べられることも、その加工方法についても、あまり知られてはいない。

俺は実を割って中の種を取り出すと、種を重曹と水を混ぜたものに浸けてアク抜きを開始した。

種は外側に茶色い渋皮がついていて、本当によくあるナッツそのものだ。

また、残った実の部分は、ラカラという度数の高い酒を用意してもらい、それに漬けた。

一週間後、種を取り出して洗ったら、三日ほど天日干しをしてほしいとお願いし、また来るとペギーさんに告げて、俺はスリリアントの街をあとにした。

★ ★ ★

十日後、俺は再びスリリアントの街へとやってきて、ペギーさんと再会した。その目的はスプラバギジュアの種を加工することだ。

厨房は役場の食堂のものを借りた。さすがこれだけの大きな街である。従業員用の食堂が役場の中に作られているのだ。

種の外側の渋皮は簡単には取れないが、アク抜きをしてあるので、渋さも苦さも抜けている。

まずは種を炒ったものを、ペギーさんに食べてもらおう。

恐る恐る口にしたペギーさんは、「……美味しい……!!」とその味に感嘆した。

次に俺はサラダを作って、スプラバギジュアの種をすり潰したものを三分の一ほど、その上にかけた。

そして、残りのスプラバギジュアの実を鍋に入れ、スイートピーという巨大な蜂の魔物の蜂蜜と

水を加えて火にかけた。

水分が飛んだら完成だ。

砂糖でもいいのだが、ここはタダで手に入る蜂蜜を使わせてもらった。

ルーフェン村で収穫して保存されていた、リングに似たレレンの実の皮を剥いて芯を取り除く。その間にオーブンを百八十度に熱しておく。

レレンの実二つを一センチの角切りにし、ボウルに砂糖、卵、溶かしたバターを入れ、なめらかになるまで混ぜ合わせる。

料理と違って菓子作りは化学だ。材料や手順を一つとして間違えれば失敗してしまうので、ここは砂糖を使うしかなかった。

そして小麦粉などの材料を、ふるいにかけてながら少しずつ入れて混ぜ合わせる。

更に、すり潰したスプラバギジュアの種をそこにに入れて、混ぜ合わせる。

クッキングシートなんてものはないので、型に貼り付いてしまうことにはなるが、俺は直接ケーキ型にそれを流し込んだ。

熱しておいたオーブンで、ふつくと焼き色がつくまで四十分ほど焼いたら、型から外して粗熱を取る。

最後に、スイートビーの蜂蜜で味をつけたスプラバギジュアのすり潰した種を振りかけて完成だ。

「スプラバギジュアの種を使った、サラダとケーキと酒だ。食べみてくれ」

俺が料理をしている間、なんだなんだと大勢の役場の人たちが、厨房を取り囲むように集まって

きていた。

そして彼らは料理を口にするペギーさんを、羨ましそうによだれを垂らしながらじっと見ている。

「ど……どうぞ？」

その視線に耐えられなくなったペギーさんは、皿やコップにそれらを取り分けて、集まった人々に振る舞った。

「うめえ……!! なんだコレ？」

「ねえ、おかわりはないの？」

「実はこれに使われている食材は、憩いの広場のスプラバギジュアの木の実なんです」

俺はそう人々に告げる。

「スプラバギジュアだって？」

「あそこに棲む魔物が、スプラバギジュアと共生することで木を守り、その結果この実が取れたのだと、アスガルドさんが……」

ペギーさんの言葉に、ワイワイと食べていた人々がシン……とした。

「あの木に棲む魔物は、放っておけば攻撃をしてこない。おまけに彼らは木の幹の中にいるから、基本姿も見えない」

俺は人々がスプラバギジュアの味に感激していたところで声を発した。

「スワロウフライの姿は見えるかもしれないが、それは卵を産む間だけで、すぐにいなくなる。放っておくだけで、毎年これが取れるんだ」

それを聞いた人々が、思わず唾をゴクリと飲み込む。

「種は専用の道具で搾って油を取ることもできる。ここの憩いの広場には二百本ものスプラバギジュアが植えられている」

俺がそこまで説明すると、役所の人々が話し始めた。

「そんなことまでできるのか？」

「今まで捨てられていたよな。随分ともったいないことをしていたんだな……」

「種を加工調理してもいい、実を酒に浸けて売ってもいい、種を搾って油を取ってもいい。使い道は無量大だ」

すると、「確かに……」と人々がうなずいた。

「スコーピアントとシエルズパスを、あの木にそのまま棲ませておくだけで、この街に新たな名産が誕生する。よく考えてみてくれ——討伐か、共生か」

俺は集まった人々をじっと見つめ、そう告げると、スリアントの街をあとにした。

この先は街の人々が決めることだ。俺は共生の可能性を示すのみ。

★ ★ ★

一週間後、冒険者ギルドに依頼料を受け取りに行った俺は、スリアントの街が、スコーピアントとシエルズパスとの共生を決めたことを知った。

ちなみに実のラカラ漬けは、浸けておく時間や年数で風味が変わり、いろんな味が楽しめる。

最短で三時間浸けておくだけでいいので、量産化も容易いのだ。

あくまで一つの可能性でしかなかった未来が、今、実を結んだ。

すべての魔物がこうして人と共に生きられる訳ではないが、共生の可能性がある限り、俺はそれを提案していきたい。

俺は改めて、そう決意を固めたのであった。

第二章 異国の冒険者

俺はとある日、フィッチを伴い、アシッド漁港へとやってきていた。

漁獲量を減らしている魔物を討伐したところ、更に漁獲量が減ってしまったため、その原因を探ってほしいとの依頼があったからだ。

ここは暖かい土地柄だが、その海にはビーチなどは作られておらず、観光客は少ない。

その原因は、水温がとても冷たいためで、基本五度を超えることがない。最も水温が高い場所でも十度以下。サウナの水風呂よりも冷たく、到底人が入れる温度ではないのだ。

主な収入源は海で獲れる海産物や魚介類。それらをよその土地や外国などに売って生計を立てている。

魚好きの元日本人の俺からすると、よだれが出るような素晴らしい環境で、俺は仕事のついでに絶対に新鮮な魚をたらふく食べて帰ると決めていた。

今回の依頼主は、漁業組合の組合長であるヤンダラさんと、この土地を治める領主のニースルス伯爵だった。

ニースルス伯爵の後ろには、従者のティポマンさんが控えていた。この辺りでは、というか、この国ではあまり見かけない、浅黒い肌の異国人に見える。

「はじめましてアスガルドさん。ニースルスと申します」

俺は、ニースルス伯爵とヤンダラさんと順番に握手をかわした。

『まもののおいしゅさん』をやっているアスガルドだ。よろしく頼む」

俺はティポマンさんにも右手を差し出したが、ティポマンさんは困ったように、ニースルス伯爵をちらりと見やった。

「お相手が握手を求めている場合は、お前もしても構わないのだよ」

そう言われて、はじめてティポマンさんが、安心したようにニッコリと微笑んで、俺と握手をかわしてくれた。

「申し訳ない、アスガルドさん。このティポマンは、元は奴隷として他の国で使われていたんだ。それを私が旅先で見かけて買い取って、この国に連れてきたんだが、その頃の間が抜けていなくてね」

「ああ、いえ……」

「まあ、従者が客人と握手をかわすことなど、そうそうないから、それは問題ないんだが……『もう、お前は自由なのだよ』と言っても、なかなか気持ちを切り替えるのが難しいらしく……」

「スミマセン」

チラリと目線向けられ、ティポマンさんが謝る。

「私は国に戻れば、家と仕事を与えると言ったのだが……ティポマンは『国に戻っても家族がいな』と、私から離れようとしななのだ」

そうやって、優しい目でティポマンさんを見るニースルス伯爵。

「……まあ、見知らぬ異国の土地で、一人というのも不安だろうから、今は私の屋敷に棲まわせて、従者してもらっている次第だ」

ニースルス伯爵は、困ったように眉を下げながらそう言いつつも、本当は少しも困っていないように笑っていた。

「気のいいやつだから、慣れればすぐに普通に接することもできると思う。それまでは、少しこうして時々、すぐに反応できないこともあるとは思いますが、気にしないでやってくれ」

そのニースルス伯爵の言葉から、ティポマンさんを日頃から優しく見守っているのが伝わってくる。見知らぬ土地で味方のいないティポマンさんが、ここまで慕って懐くのも無理はないと思えた。

「分かりました。では、まずは問題が起きている現場を見させていただきたいです。ちなみに討伐したという魔物はなんだったのですか？」

俺の問いかけに、ニースルス伯爵が「では、すぐ近くですので、歩きながらお伝えしましょう」と先に立って歩き出したので、慌ててヤンダラさんが先頭に立った。

そして、ニースルス伯爵が話し始めた。

「討伐したのは、ハバラリューシヤンの群れの、主にメスになります」

「ハバラリューシヤンですか。冷たい海を中心に棲息している、フカフカのぬいぐるみのような、可愛らしい見た目の魔物ですね」

ハバラリューシヤンは、ラッコとカモノハシの子のような魔物だ。ほぼラッコの見た目で、カモノハシのような尻尾を持ち、カモノハシ同様、卵を産む。

「はい、彼女らは沿岸から大体十キロ圏内のところに、群れを作って棲息していました。ただ、彼女らが海を荒らすというので、このヤンダラが、組合の人間たちと相談して、討伐を決めたようです」

そう話を振られて、うなづくヤンダラさん。

「ですが、漁獲量は増えるどころか、以前よりも減ってしまいました」

そうやって、『訳が分からない』という表情で俺を見るヤンダラさん。

「こんなのは、はじめてのことです。漁師たちからは『討伐の際に冒険者たちが海を荒らしすぎたのでは』という意見までもが飛び出る始末です」

そう語るヤンダラさん自身も落ち着きがなく、組んだ手の親指を忙しなく動かして、更に続ける。「その原因の調査を冒険者ギルドに依頼したところ、アスガルドさんをご紹介いただいたという訳です」

「……本当は、私としては、ハバラリューシヤンを討伐することで、生態系の一部を破壊してしまつたのではないかと、そう考えているのですがね」

ニースルス伯爵は眉を下げながら、困つたように微笑んだ。

ティポマンさんのことといい、彼はあまりこの国の常識にはとらわれない人のようだ。

ティポマンさんは異国人の元奴隷で、この国の奴隷制度は大分以前に廃止されたとはいえ、まだ

まだ偏見は根強く残っている。

昔、異国人の奴隷が、大勢この国に連れてこられた際に、疫病が蔓延したことが原因で、異国人は疫病持ちのイメージがついてしまったのだ。

しかし、そんなことは気にせず、一人の人間としてティポマンさんと接するニースルス伯爵は、疑問に思ったことは自分の目で見て確かめる人なのだろう。

彼の見立てでは、ハバラリューシャンは討伐すべきではなく、共生すべき魔物だという判断だった。

ニースルス伯爵が、事前にヤンダラさんたちから相談を受けていれば、おそらく討伐前に冒険者ギルドに相談し、俺のところへ話が来ていたことだろう。

だが、『魔物との共生』という考えはまだまだ世間に浸透していない。魔物も生態系の一部に組み込まれている場合があることを理解している国民は、ほとんどいないのだろう。

一刻も早く海の問題を解決したかったヤンダラさんたちは、ニースルス伯爵に相談せずに、討伐依頼を出してしまったのだ。

「確かに、言う通り、生態系を壊してしまっただと思う。現場を見てみないことには正確な判断は下せないが、ハバラリューシャンは、この海の生態系の、重要な一部であったと言えるな」

生態系の一部とはいえ、数が増えすぎているのであれば、討伐して数を減らさなくては、共生は不可能だろう。

だから冒険者ギルドも、俺を通さずに討伐として依頼を受けた。

だが、ヤンダラさんたちは、街に来た冒険者たちに、少し数を減らすのではなく、子供が増える原因となる、メスのハバラリューシャンの討伐を頼んでしまったらしい。

結果、生態系が壊れ、漁獲量が更に減り、かえって状況は悪化した。

ニースルス伯爵にも、領民たちを納得させるだけの知識がある訳ではない。そこで困った彼は、冒険者ギルドに再び依頼をし、俺が呼ばれたという訳だ。

冒険者たちが討伐時にその場を荒らすということは、正直、少なくともはないのだ。彼らは討伐を優先するがあまり、周囲の環境を顧みない。

討伐するのに余裕があればわざわざそんなことはしないが、基本、討伐する魔物のランクに近い冒険者がやってくる。

Cランクであれば、DランクかCランク、というように。そこにBランク以上が来ることはまれだ。

なぜなら街中に出るようなCランク以下の魔物は、素材を売っても儲けることができないからだ。討伐報酬のみしか、冒険者の手元には残らない。

強い冒険者はダンジョンにこもった方が稼げる。だから討伐で街に来る冒険者は、基本新人か、ダンジョンでは稼げない冒険者になるのだ。

彼らは戦力に余裕がないので現場を荒らす。結果、街の人たちから、冒険者に対する苦情が定期的に冒険者ギルドに入ることになる。

冒険者は慈善事業ではなく、ただの職業の一つだ。討伐のような、自分たちにとっても面倒なこ

とで、依頼者に寄り添った手厚い対応などしない。

現場を多少は荒らさないと、魔物を討伐できないことを依頼者に事前に伝えれば済むだけの話だが、現場を見て初めてその状況が分かるタイプの依頼になると、冒険者ギルドも説明はできない。

だが、『まもののおいしゃさん』を始めてから、少しずつそこも変わってきている。

今は生みの苦しみの時期なのだ。いつかすべての人が納得できる環境が必ず整えられる。それまで一つ一つのことを解決し、改善していくまでだ。

現場に着くと、そこにはほとんど何もなかった。

俺は、ニースルース伯爵とティポマンさんと共に、ヤンダラさんが出してくれた船の上から水中を覗けるガラス付きの箱を海中に入れて、そこを覗いて愕然とした。

本来、海にたくさんあるはずの海藻類が見当たらないばかりか、魚もほとんど泳いでいない。これでは状況を改善しても、すぐに元の海に戻すのは難しいだろう。

俺がそのことを告げると、ニースルース伯爵もそうだが、特にヤンダラさんが露骨に肩を落とした。

俺のたらくく魚介類を食べて帰る計画も、このままであれば頓挫しそうだった。

「他の魔物が原因ということはないのですか？」

魔物が生態系の一部であるという事実にも、どうしても納得のいかないヤンダラさんがそう尋ねてくる。

「漁師たちからは、魚の代わりにフルシザーズが大量に獲れるようになり、しかも、その魔物を網を切られるといった事件の報告を複数受けているのです」

フルシザーズは貝や魚を食べる魔物だ。

「コイツらの数が劇的に増えたことが、そもそもの不漁の原因ではないかと、私を含め、組合では考えているのです」

拳を握って、重大な発見をしたとでも言いたげに、こちらを見てくるヤンダラさん。

「ですが、ハバラリユーシャン討伐後に漁獲高が大幅に減ってしまったことで、組合からはその討伐費用を捻出できなくなってしまっ……」

そう言っ、ヤンダラさんが視線を落とす。

「本当は、ニースルース伯爵に、その費用を肩代わりしていただきたくてお願いをしたのです」

ヤンダラさんは、ニースルース伯爵をチラリと下から上に見上げた。

「漁師たちをはじめとする、街の人々の生活は、日に日に困窮していつているのです。ハバラリユーシャンの活用方法など考えている余裕は、我々にはないのですよ、アスガルドさん」

ヤンダラさんは更に拳を握って縦に振り回しながら熱弁をふるった。

「いやいや、それ、討伐しなくとも、何とかなるぞ？ むしろ、この街が活性化するだろうな」

俺の言葉に、今まで黙っていたティポマンさんがぼそりと言った。

「オレ……分かる……ハバラリユーシャンのいない海……海藻がない。海藻のいない海、魚いない。それだけ」

ティポマンさんの言葉に、ニースルス伯爵とヤンダラさんが目を丸くする。

「何か知っているのかい？ ティポマン」

「オレ、この国来る前、冒険者、だった。魔物のこと、少し分かる」

「……なるほどな。そういうことなら、ティポマンさん、あんたにも協力してもらおう」

「ニースルスさんのためになる、手伝ってもいい」

俺たちは早速、アシッド漁港復活大作戦を開始したのだった。

俺とティポマンさんは、まずは手の空いた漁師たちに、フルシザーズを狙って漁をするように頼んだ。

フルシザーズは、カニの魔物だ。

普通のカニよりも刃先が鋭く、指を挟まれようものなら、一瞬で切り落とされてしまう。

彼らは鉄線入りの投網とあみも簡単に破ってしまうハサミを持っているが、その攻撃力と繁殖力が、普通のカニよりも高い以外は、魔物に属するとはいえ、ほとんどただのカニだ。

冒険者でなくとも投網漁で簡単に捕まえられるので、容易く数を減らすことができる。

おまけに魔物食は田舎では浸透していないが、味はまあまあうまいので、都会だとフルシザーズを出す店もあるのだ。

そしてその味は、フルシザーズが何を餌にしていたかによって変わる。

天敵であるハバラリューションが近くにいなくなったことにより、フルシザーズはこの辺りの海のものほとんど無くなってしまいうくらい、好きなものをたらふく食べているはず。

今のフルシザーズは、身に栄養が一番詰まった、うまい状態と言えるだろう。

生態系を元に戻すために数を減らしつつ、捕獲したものは商品にすることができる。

フルシザーズ漁を最初に頼んだ理由は、フルシザーズの数が増え過ぎたことと、この海に現時点でフルシザーズの敵がいなかったことからだ。

フルシザーズが原因で漁獲量や海産物が減ったというのは、ある部分においてはその通りだった。

フルシザーズの主食は魚だが、最も好むのは貝類である。

そして、その貝類の主食は、ヤナカドという海の中の植物に付着する、藻もである。

ヤナカドには藻が付着しやすいのだが、ヤナカド自身ではそれを取ることができない。それを食べる貝類を棲まわせることで、藻を食べて取ってもらうのだ。

そうしなければ、ヤナカドは窒息ちっせきして死んでしまう。

また、ウニにとても似た、ニニガという生き物が大変好む植物もまた、ヤナカドだ。

つまり、ヤナカドのある場所にはフルシザーズとニニガがいることになる。

ハバラリューションは、それらを食べる魔物なので、そこに集まってくる。

だからハバラリューションの数が増え過ぎると、ニニガやフルシザーズの数が減るのだ。

逆に奴らがまったくなくなってしまうと、ヤナカドに付いた藻を食べる貝類をフルシザーズが食べ尽くして、残ったヤナカドをニニガが食べ尽くしてしまう。

だから港近くの海の中に、ほとんど何も残っていないなかったのである。

ヤナカドは非常に珍しい植物だ。種によって増える性質を持ち、また、もう一つの特徴として、昆布のように出汁が取れて、そのものも食べられるのだ。

ヤナカドの群落は『ヤナカド場』と呼ばれる、豊富な餌場になっている。

また、餌が豊富だけでなく、稚魚などが大型の敵から身を守る隠れ家としても役に立ち、時にはヤナカドに卵を産みつけにくる生き物もいる。

ヤナカド場は海水の汚れを取り除いたり、水中の酸素を増やしたり、海底の土壌を安定化させるために必要なものなのだ。ハバラリューシヤンはフルシザーズを餌にするが、子供のいる時期はその子供が攻撃される危険があるために、オスはフルシザーズをあまり食べようとしない。

メスだけが母乳のために危険を冒してでも栄養価の高いフルシザーズやニガを取りに行く。今は繁殖期だから、おそらく子供がいるはずだ。港近くまで来て餌を取るメスが減ったことで、余計に近付かなくなったのだろう。魚すらいない訳だしな。

海の中は一見すると何も無いように見えて、ヤナカドの種子が水中を漂っていたり、発芽を待っている状態だ。

ヤナカドの成長は速い。育ったところに再び様々な生き物が戻ってくるまでに、それらを食べるフルシザーズの数減らさなくてはならない。

餌であるヤナカドがいなくなり、港の近くに現れなくなったニガが戻ってくれば、いずれまたハバラリューシヤンは港の近くまで集まってくるだろう。

そうすれば、また、安定した生態系を保てるのだ。

次に俺とティポマンさんは、ニースルース伯爵の了解を得て、周辺の伸びた木の枝を刈った。ヤナカドは成長の速い植物だが、光合成をするため、陽の光が当たらないところでは育ちにくい。

ヤナカドがほとんどいなくなってしまった今、少しでも成長を促すために、陽の光が当たるようにした。

「——やれることはやりました」

俺とティポマンさんはニースルース伯爵に報告をした。

「あとはヤナカドが育ち、多くの生き物たちとハバラリューシヤンが戻ってきてくれて、フルシザーズやニガの数が適正になれば問題は解決です。今できることはフルシザーズを捕獲することです」

それを聞いても、ヤンダラさんはまったく安心できないといった表情だった。

「数を減らすことと、売り物目的に、今フルシザーズを取ったとしても、ヤナカドが育つまでの間は、魚もニガも取れない訳ですよね？」

「まあ、少なくとも一か月はかかるでしょうね……」

「一か月以上もの間、フルシザーズを取り続けられる訳ではありませんよね？ その間、我々はいつたいてい暮らしたらいいのか……」

組合長として漁師たちにどう説明したものかと、考えあぐねているようだった。

「——ハバラリューシヤンのオスを使ってはどうです？」

「ハバラリューシヤンのオスを使う？」

俺の提案にヤンダラさんが首を傾げる。

「ハバラリュージュシャン、人間に対しておとなしい。人近付く、気にしない。とても可愛い。今子供いる」

俺の代わりに、ティポマンさんが説明してくれる。

「倒したの、メスだけ。オス、隠れて、子供たちの世話してる。それ見せる。お客来る」

ティポマンさんが俺の代わりに説明を続けてくれた。

「見せるって言ったって……魔物ですよ？ 安全の保証なんてできませんし、日頃から観光客の来ないこんなところに、わざわざ魔物を見に来るお客なんて……」

ヤンダラさんは納得できない様子だった。

「俺は既に、何もない村に、レオペンという魔物の観光ツアーを提案し、それが人気を博したという実績を持っています」

「本当ですか？」

「ええ。それに王都近くでは、魔物の観察ツアーと称して、身隠しのロープを使用して、ダンジョンに観光客を呼んでいくくらいです」

「そんなことが……」

「ハバラリュージュシャンを見慣れているヤンダラさんたちからすれば、ニニガをはじめとする海の幸を食べてしまう、迷惑な魔物でしかないでしょうが」

「正直可愛いと思ったことなど、一度もありませんね……」

「ですが見たこともない人たちからすれば、ただの愛らしい生き物にしか見えませんよ。ハバラリュージュシャンの人間に対する安全性は、冒険者ギルドが保証しますしね」

俺は漁に出れない漁師たちの船を使って、ハバラリュージュシャンの観光ツアーを行うことを強く提案した。

「——いいんじゃないかな」

ニースルース伯爵が提案に好感を示してくれた。

「どちらにしろ、何もしなければ、ヤナカドが育って魚たちが戻ってくるまで、漁師たちは何もできないんだ」

「それはそうですが……」

「干上がってしまうくらいなら、やれることはやってみよう。うまくいけば、観光客のいないこの漁港に定期的に人を呼べるかもしれないね」

ニースルース伯爵が、ヤンダラさんに微笑みかける。

「それに、観光客が魚やニニガを食べてくれたら稼ぎになる訳だし、新しく料理店や土産物屋なんかも増やせるかもしれないよ？」

そして、ニースルース伯爵は、「最後は私が責任を持つよ」と決断してくれた。

そう言う彼は、眉を下げながら、ヤンダラさんに一見お願いする風な、歩み寄っているかのような態度だったが、その目の奥は、必ず成功させてみせるという強い意志に輝いていた。

「かわいい！ 見て！ 赤ちゃんのお世話をしてる！」

「本当だね、とても仲がいいんだね」

アシッド漁港には、連日あちこちから観光客が押し寄せていた。漁師たちの船は順番待ちのお客で満員御礼状態だ。

ハバラリューシャンは、とても天真爛漫でお茶目な性格をしている。

オマケにそのフカフカの可愛らしい見た目で、今は親とそっくりな子供つき。

人々が襲ってこないと分かれば、仲間同士で戯れたり、人間に反応してみせたりと、サービス精神旺盛な魔物だ。

冷たい海にしか棲息しないハバラリューシャンは、人の住むところの近くにいたことが少ない。そのせいで余計に警戒心が薄いのだろう。

この漁港は人の住む場所に最も近いところまでハバラリューシャンが現れる、数少ない海なのだ。港に食べ物がなくなつたために、普段いる場所から離れたところで子供の世話をしているが、港に餌が増えるようになれば、更に港に近いところまで戻ってくるだろう。

そして、ハバラリューシャン目当ての観光客は、それを横した人形などの土産物を買い込んで、フルシザーズに舌鼓したつづみを打ち、みな一様に満足して帰っていく。

この港の魚やニニガはともうまいと評判で、外国からもわざわざ買いつけがあり、稼ぎの大半がそれらの輸出によるものだ。

今後は現地でそれらを食べようとする観光客が増えるかもしれない。

俺は、リリアへの土産として、フルシザーズを持って帰ることにした。

そして、海が回復した頃にまた、ここにうまい魚とニニガを食べにリリアと一緒に訪れることを、ニースルース伯爵とティポマンさんに約束して、俺はフィッチと共にアシッド漁港をあとにした。

第三章 老人だけの村

まだ朝食を終えたばかりの早朝の時間、我が家を訪ねてきた誰かのノックの音に、俺はドアを開けた。

すると、そこに立っていたのは、獣の檻にいた頃のパーティーメンバーである、槍使いのリスタだった。

「リスタ？」

「ひ、久しぶりね、アスガルド……」

きれいなワンピースを身につけて、恥ずかしそうに少し視線を下に落として頬を染めたリスタは、髪をかきあげて耳にかける。

「どうしたんだ？ こんな朝早くから。まあ立ち話もなんだから入ってくれ」

俺はリスタを招き入れて椅子に座らせると、スイートビーのハチミツを垂らした牛の乳を出した。

「美味しい……！ 優しい甘さね」

「だろう？ うちの村の名産なのさ」

その後、リスタはもじもじして、なかなか用件を話そうとしなかった。

「ちなみに、なんでこんなところまで来たんだ？ 獣の檻が使つてる定宿じやうやどからうちの村までは、か

なり遠かっただろう？」

それを聞いたリスタがビクツとする。

「え、ええ、まあそれなりに。でも、大したことはなかったわ」

そして、彼女はぎこちなく微笑んだ。

まあ、Sランク冒険者からしたら、そんな大した距離でもないか。俺でさえ、馬車がないなら今まで歩いて移動するしな。

「私が……」

「？」

リスタがポツリと話し始める。

「私が以前、あなたの仕事を手伝ってみたいって言ったの、覚えてる？」

「ああ、冒険者を引退したらやってみたいと言っていたな」

「あなたのそばにしばらくいて、仕事を見学させてもらえないかしら？ 助手として、もちろん無償で仕事を手伝わせてもらおうわ」

「獣の檻はどうするんだ？」

「それがね……しばらくの間、ランクの低い冒険者が減ったことで、私たち、下位のクエスト依頼も全部受けていたでしょう？」

「ああ。そうだったな」

魔物を討伐するなという気運が高まったことで、ダンジョンに潜れないレベルの冒険者たちが、

軒並みなくなってしまったのは記憶に新しい。

「ようやくCランク以下を受ける冒険者たちが戻ってきたんだけど、ここまで休みなく働き詰めだったから」

そう、リスタは続けた。

「ああ、そうだったな。冒険者ギルドから聞いているよ」

「ここで長い休みを取ろうって、ランウェイがみんなに言ったのよ。そして全員がそれに賛成したの。だから、これからしばらくお休みなのよ」

「なるほどな。ランウェイはこっちに帰ってくるのか？」

「クランマスターとして緊急招集時のために、メンバー各自の居場所をギルドに報告したり、まだ終わってないクエストを終わらせたら、村に戻ると言っていたわ」

リスタが言うには、ランウェイがクエストを一番受けていたようだ。

責任感の強い彼らしいな。

「それはよかった。もう何年もここには戻ってないからな。親父さんも喜ぶだろう」

「本人は恥ずかしいみたいだけどね」

リスタが微笑む。

「いるだけいいさ、家族つてのは」

俺も微笑んだ。

「そうね……」

家族の少ない俺のことを思ったのか、リスタが視線を落とす。

しまった、気を遣わせてしまったか。

「それで、俺の仕事の見学だったな。何が知りたいんだ？ 魔物のことなら、俺とお前はそう知識も変わらないはずだが」

話題を変えた俺に、リスタがパツと表情を明るくして顔を上げる。

「ええ。後学のためにお願いできるかしら？ 魔物のことは分かっているけど、依頼者や役場とどう交渉するのが分からないの」

俺が獣の檻にいた時代は、それはたいてい俺かランウェイの仕事だった。

「魔物に関しては、討伐や捕獲以外したことがないもの。共生や活用ができそうなら、それを提案するのでしょよう？」

なるほど、ギルドを通したクエストしか受注したことがなければ、確かにそういうのは分からないよな。

「ああ、もちろん構わないさ。Sランクの冒険者が手伝ってくれるならありがたい。ちょうど今、一つ依頼を受けていてな、とても大きな仕事になりそうなんだ」

「大きな仕事？」

リスタが首を傾げる。

「お年寄りしかいない村を集団で襲う魔物が現れて、農作物が軒並みやられてしまったらしい」

「今まではなかったのよね？ どこかから移動してきたのかしら……」

リスタが考え込むように呟く。

「そこは介護の必要なお年寄りが多いから、農作物を育てる若い人手が足りない。ただでさえ少ない、その農作物を荒らされて、食べるものがなくて困ってるんだそうだ」

「でもギルドとしては、『活用共生検討の余地あり』と判断したのね？」

「そういうことだ。だから現場に行つて判断するが、俺の予想する限り、共生のためには、その場に大きな家をついでる必要があるそうなんだ。そういう意味で、大きな仕事さ」

「家……？ それを建てれば解決するの？ ごめんさい、今のところ状況がまったく見えてないわ」

リスタは困ったように眉を下げてから、話を続けた。

「建物があれば何か状況が変わる魔物なんて、今まで遭遇したことがないもの」

「……確かに今回の魔物は、テイマー以外には特性が知られていないかもな。討伐も捕獲も、依頼自体が出るのがほぼない魔物だし」

「そうなの？ なら、私も見たことがないかもしれないということね？」

「そうだな、リスタはないと思う。まあ、とりあえずその村まで行こうか」

俺は村長さんにリリアを頼むと、フィッチを連れてリスタと共に馬車に乗り、目的地へと向かった。

目的地のスパツサ村は、村とは思えないほど荒涼こうりやうとしていた。農業の担い手が少ないというだけ

あって、元は農地だったと思われる土地には雑草が生え、かじろうて残った農作物も、明らかに何かにかじられたり、引きちぎられたような痕跡こゝろが残っている。

「村長のマイルズです。このたびは遠くまでありがとうございます」

マイルズ村長は疲れ切った表情で俺たちを出迎えてくれた。

「この村の貴重な食糧を魔物に荒らされて、ほとほと困り果てております……」

疲れているのは、介護と農業に加え、魔物に畑を荒らされたことによる精神的なものからかもしれない。

俺はマイルズ村長に質問をする。

「村人は全部で何人ですか？ そのうち、働ける人数は何人になりますか？」

「働ける人数……ですか？ 村人は全部で八十二人です。そのうち介護が必要な人数を除けば五十八人ですが……」

人数を確認するように、考えを巡らせるマイルズ村長。

「つきつきりで介護をしなくてはならない者もおりますので、実際には毎日交代で三十人くらいが農作業に従事しています」

三十人で八十二人分の食糧を作る。それもお年寄りが休みなく交代で介護をしながらとなると、作業効率は若者だけの場合の半分以下になるだろうな。

本来なら食べる分以外の収穫物を売って、冬の備えなどをしたいところだろうが、そんな余裕はとてななさそうだ。

「魔物にとっても食べるものの少ない冬場には、こんなこともありましたが、冬でもないのにこんなに連日魔物が現れるのは初めてのことで……」

冬場は魔物に限らず、動物なんかの被害報告や討伐依頼が増えるんだよな。

「芽が出たばかりのものまで食べられてしまうのです。このままではとてもここでは暮らせませんが、かと言って行く当てもありませんで……」

マイルズ村長はぐったりしていた。

「……村から出ていった息子や娘さんたちは、いるわよね？ 彼らは親御さんを引き取るうとしたいの？」

「こういう村から出た人たちは、自分たちの生活で手一杯なんだろうさ。うちの村もそうだからな」

ただ、悲しみに暮れていても何も解決しない。

俺はマイルズ村長に質問を続けた。

「まずは魔物が急に連日村に降りてくる原因を調べます。魔物が棲んでいると思われる山は、あちらでよろしいですか？」

俺は近くの山を指さした。

「はい、普段はあの山に棲んでいます。たまに木の実やキノコを取りに山に入っていました子がおかしくて近付けなくなってしまい、余計に食べるものがありませんで……」

「——リスタ」

マイルズ村長の言葉を聞き、俺は彼女を呼んだ。

「ええ。では、まずはその山を調べてみますね。状況が変わった原因が分かれば、後ほど報告いたします」

やり方を勉強したいというリスタにも、説明を少し任せるつもりでいた。リスタはそれを汲み取って、俺の代わりに話した。

そして、俺とフィッチとリスタは、スパッサ村の近くの山を登っていった。

人の通れる道は少ないが、確かに日頃から木の実やキノコを採りに入っているというだけあって、整地とまではいなくても、人の通りやすい道ができています。

そこでリスタが呟いた。

「……変ね」

「——ああ」

鳥の鳴き声がない。虫も少ない。木の実やキノコも見当たらない。まるで冬の森のように、あまりにも食べ物と生き物が少なすぎるのだ。

「これじゃ人里に食べ物があれば、襲ってもくるだろうな。なんで急にこんな風になっちゃったんだろう」

「土を見る限り、天候がおかしかったとは思えないわ。長雨が続きたりすれば、もっと土が流れて、木の根がむき出しになっているはずよ。でも、植物は普通だよ」